

2018.5
(公社)富山県薬剤師会
広報誌

とみ やく 富 薬

5号

第40巻
No.346



シャクヤク *Paeonia lactiflora* Pall. (ボタン科 *Paeoniaceae*)

生 薬 シャクヤク（芍薬） 秋に掘り上げ、根を株元から外し、冬に外皮を剥ぎ、自然乾燥する。

成 分 モノテルペン配糖体：paeoniflorin, albiflorin, oxypaeoniflorin, benzoylpaeoniflorin, paeoniflorigenone、フラボノイド、タンニン、安息香酸等。

効 能 鎮痛・鎮痙、婦人用、冷え性、かぜ、皮膚疾患消炎・排膿薬とみなされる多くの漢方処方に配合される。

生薬 キキョウ

元富山県薬事研究所
薬用植物指導センター

村上守一氏 写真撮影

〇〇表紙について〇〇



シャクヤクはボタン科ボタン属の草本植物の総称で、世界には約三十数種類の植物が分布しています。一般に言われるシャクヤクは日本薬局方で規定されている *Paeonia lactiflora* で、中国東北部、モンゴル、東シベリア、朝鮮半島北部に分布する多年草です。栽培すると4～5年で径2～5cm、長さ30～50cmの紡錘状の根を多数出す大株となり、春に根頭部から20～30本の直立した茎を出します。この姿から「立てば芍薬」と表現されたのでしょう。葉は2回3出複葉、小葉は楕円形または披針形。花は頂生し、大形で白色～赤紫色と変化に富みます。李時珍(1518～93)は「芍薬は倬約といふ意味だ。倬約とは美好の形容で、この草は花の姿態が倬約たるものだからこの形容詞を名としたのだ」と述べ、その美しさを表現しています。また、『爾雅翼』(1174)には「食の毒を制すること芍より良きはない。故に薬の文字を名に用いるのだ」ともあり、観賞用、薬用共に珍重される植物です。

その重要性から中国では古い時代より栽培される植物ですが、日本への渡来は何時頃であったかは諸説があります。その中で最も古い記録は『出雲風土記』(733)で島根郡と秋鹿郡の山野にある草木の中に芍薬が記されています。山野にある草木という表現は出雲に自生する植物と考えてよく、国内に自生するヤマシャクヤク (*P. japonica*) ではないかと思われます。次いで小野小町(9世紀頃)の九十九株植えられたという逸話がありますが、後の世に創作されたものと考えられ、植物は伝来していなかったと思われます。『延喜式』(927)には山城国など15ヶ国から約122斤の献納が記録されていますが、恐らく自生のヤマシャクヤクの根と推測されます。次いで『本草和名』(918)には「和名 衣比須久須利一名奴美久須利」とあり、「えびすくすり」とは外国薬の意味で単に中国の本草書または輸入生薬から名前を取ったものと考えられています。『和名抄』(931～937)にも「和名衣比須久須利又沼美久須里」とあり同様です。

日本に芍薬が植えられていた確かな記録は『仙伝抄』(1536)からと言われている。この書は天文5年に池坊専慈が相伝したと言われる伝書で「三月のしんにはつつじしゃくやくなど用候ことに木のうつりによし」とあり、実際に活けられる草花を記したものと思われることやヤマシャクヤクの開花後1～2日で散る性質は生け花には適さないことなどから、渡来した芍薬の花を用いていたのではと想像されます。江戸時代に入ると、その記録は多くなり、『花壇綱目』(1681)に32品種が、『花壇地錦抄』

(1695)には116品種が載っています。『花譜』(1698)には「芍薬の色、大抵、紅、紫、三品にして、今日本の芍薬凡百余種あり」と述べ、『増補地錦抄』(1710)には163品種が掲載されています。これらの書物が出版された元禄時代(1688～1704)は文化が発展し、芍薬の品種改良にも力を入れていたことが伺えます。江戸後期の『本草綱目啓蒙』(1803)には「薬に在るは花圃の根を以て養力をからずして栽るもの生乾にして用ゆべし。ただ粗皮を去て乾たるものなり。又唐様と称するは漢渡に擬して沸湯に浸し過し乾す。ゆえに性味薄して生乾に及ず」と生薬の調整法を記しています。

明治時代以降は神奈川県立農事試験場で品種改良に取り組み、昭和7年に新品種700品種が発表されました。戦後は多くの欧米切花種が導入され、昭和40年代には新潟県で2新品種の種苗登録がなされるなど、花としての価値が見直されてきています。

薬用種としての栽培種は特に品種改良されたものはありませんが、古来より和芍と呼ばれるものは子房の外面に毛がある種が栽培され、アンドンと呼ばれる青茎白花種が最良品種として栽培されてきました。奈良県で栽培される大和芍薬はこの系統で地元では「梵天」と呼んでいます。その他の品種では、一重で花径が大きい金蕊咲き品種や一重芍薬の実生栽培も行われています。近年になって旧国立衛生試験場の北海道薬用植物栽培試験場において増産種の「北宰相」が種苗登録されました。

(村上守一 記)